

Title	リカアドオ地代学説の先蹤 (上)
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.9 (1923. 11) ,p.1570(96)- 1598(124)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231113-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカアドオ地代學說 の先蹤 (上)

津 田 誠 一

ダボッド・リカアドオの諸般の經濟學說中、絢爛な頌詞と嚴烈なる指彈と、褒貶交々馳驟するは其地代學說より甚しきはない。乍併彼れが該學說上に於る既往の獨斷を排除し曖昧を拂拭し、清澄透徹せる思索に依つて遂に收穫較差の一元論論據に立ち、以て地代の發生變動を極めて合理的に闡明せる一事は、斷じて後人の無視を許さざる功績である。蓋し遙遠の昔に遡及するまでも無く、フイジオクラートの人々は其 *Product net* の思想に基き、地代其物をしも天賦

の福惠に歸して復た徹底を企圖する事無く、アダム・スミスに於ては或は地代を以て價格の構成分子にあらずと爲し、或は地代を以て生産費中に加入するものと看做し、矛盾撞着歴然たるものあり。偶々リカアドオの推理の明は、縹渺たる神韻の蔭に眞理を蔽ひ又苟くも曖昧を假借するの儉安を許さず、只管純然たる原因結果の機械的關係に於て、地代の本質の徹底的究明を大成し得たるものである。凡そ讚歎誹謗の孰れを問はず苟くも地代學說を云爲するほどの者が、リカアドオの所論を無碍に閑却し能はざる所以の一は正に爰に存するものと云はねばならぬ。然るに頃者彼れの功勞を不當に損傷せんとする別個の企圖は、彼れは唯だ他者の學說を蹈襲反覆したる以上、何等自家獨特の創意を以て是れに寄與せる所無しとの、非難の吐露を見るに至つた。斯くて亦たリカアドオの地代學說は、實に

其實質的價值に於けるのみならず、其獨創的貢獻に關しても、紛々たる毀譽の焦點と化したのである。然らば即ち過賞過貶の兩偏執より力めて離脱し、彼れが其所論の幾許を前人並に時人に繼承して其幾許を後人に相傳せるかを爰に虛心に探求するは、あながち無意義の穿鑿ではあるまい。

今這般の消息を考察するに方り、先づ吾人に彼此對照の基準を供するリカアドオ地代學說の精髓を要約すれば、(一)地代は價格の一構成分子にあらず、或は寧ろ一構成分子たるを得ず。又是に關聯して、地代を發生せざる限界耕作地は常時存在する。蓋しリカアドオに従へば、穀價を決定する者は最大多量の勞働を以て生産せられたる其穀物、換言すれば地代其物を齎す能はざる限界耕作地に於ける、資本及勞働の最終投入單位に依つて生産せられたる其穀物である

からである。尤もリカアドオは生産の失費並に普通の利潤を報償する以外に、全然地代を提起せざるが如き土地は實在する事無しとの抗論に對し、假令田圃全體としては能く地代を支拂ふとも、尙且是に投入する資本及勞働の最終單位が地代を齎さざる可きを云爲し、以て自説を擁護せるの事實に徴すれば、~~以て~~も地代無き土地の實在を固執しない様にも見えるが、此は偶々討論上の歸趨であつて、彼れが其所論の説明に採用せる例解に見るも、其學說が地代無き土地の實在を基點とせるは明白である。(二)地代は種々なる土壤の擅有せる地味の肥瘠或は地位の便否に基く收益の較差より發生する。(三)既墾地に總收穫の増徴を欲して累次勞資の投入を追加する時、收穫遞減作用の結果、各投入單位間に收益の較差を見る場合にも亦た地代は發生すると云ふ三條に歸着する。而して如上の諸項

の全般若しくは一部の關與する限りに於て、リカアドオ地代學說の先覺たる榮譽を享得す可き人々は、James Anderson, Robert Torrens, Edward West, 及び Thomas Robert Malthus の四者である。私は順次必要なる限度に於て、彼等の思索の梗概を窺はうと思ふ。

II

アンダーソンは蘇格蘭の實踐的農業家である。其地代の性質を附隨的に討究せる最初の著作“An Enquiry into the Nature of the Corn-Laws; with a View to the New Corn-Bill proposed for Scotland”を時の上司に献呈せるは一七七七年十二月、即ち未だ Sir James Stewart が至上至高の經濟學者として公衆の大半に讃仰せられ、同時に亦た一般の注目が漸く「國富論」上に轉向せられてから、僅々期年を閱せる交である。然も本来直接現實の評議を動因に執筆せら

れたる田夫の小冊は、毫も地代を専門的“ex professo”に取遇する事無く、單に派生的隨伴的に其性質の解明を試みたに過ぎないので、何等朝野の視聽を喚發せず終つたのである。爾後著者自ら蒐輯發刊せる“Essays relating to Agriculture and Rural Affairs,” 3 vols. 1777-1796 並に“Recreations in Agriculture, Natural History, Arts and Miscellaneous Literature” 1796-1802の兩集に於ても地代は依然從屬的地位を占據したに停まる。若し彼れが自家の發見の重要な所以を意識し、單獨に之を地代の性質に關する研究として衆前に呈示するか、或は其國人 McCulloch が行へる如くに、自己の思想を異邦に發揚す可き才幹の片鱗をだも具有したりとせば、事態は必定一變したのであらう。(Karl Marx: Thorien über den Mehrwert, herausgegeben von Karl Kautsky, BD. II. Teil. I. S. 305)

先づ彼は地代の發生を説明して云ふ「凡そ如何なる國土に於ても、其全住民を支持するに足る可き穀物に對する需要は存する。而して其穀物は莫大なる失費或る場合に於ては最も法外なる費用を堵するにあらざれば、他の國土から輸致する事が不可能であるから、通常住民は彼等自身の郷土に於る所産に依つて扶持せられるのを、最も有利と認めるに至る。然し其産物が農夫に依つて給付せらるゝ價格は、事情に従つて著しく相異なる。

如何なる國土に於ても、豊饒の點に關し互に大差を存する様々の土壤がある。今假に此等を夫々 A・B・C・D・E・F 等の文字を以て指示せらるゝ種々なる階級に排列し、A 階級は最も豊饒なる土壤を包含し、他の諸文字は順次豊饒の度を低下する各種土壤の階級を表示するものと想定する。扱而最も貧瘠なる土壤を耕耘する失

費は最も豊饒なる土壤を耕耘する失費に匹敵するか或は是より多額なる可きを以て、必然の結果若しも各々の田圃に産出する同量の穀物が等價に賣却出来るものとすれば、最も豊饒なる土壤を耕耘するに對する利潤は他を耕耘するに對する利潤よりも、甚だ莫大であるに違ひない。そしてそれは不毛の度の増進するに従つて引續き減退するから、結局或る劣等階級地の耕作費が全産物の價格を平等化すると云ふ事實が生ずるに違ひない。

如上の前提を以て、F 階級は其所産の燕麥が一ポルに就き十四志に賣却出来れば、其耕作費を辛うじて支拂ふに足り全然何等の地代をも提供せざる底の總ての田圃を包含し、又 E 階級は其所産が一ポルに就き十三志に賣却出来れば恰も其の失費を報償して何等の地代をも提供せざる所の田圃を包含し、同様に D・C・B・A の諸階

級は夫々其所産を一ボルに就き十二志・十一志・十志・九志に賣却し得れば、精密に各自の耕作費を報償して毫末の地代をも伴はぬものと假定せよ。

更に此等の田圃の存在せる國土の全住民が最初の四階級、即ちA・B・C・Dの所産を以て支持し得可きものとせよ。然らば若しも其國土の燕麥の平均賣價が一ボルに就き十二志なるに於ては、D階級の田圃を占用せる者は、全然何等の地代を支拂ふ事無く辛じて之を耕作し得る餘裕を存する。故に若し此等の田圃が穀物よりも一層僅少なる失費を以て齎し得可き他の産物の皆無なる時は、農夫は地主に對し如何なる地代をも提供するを得ない。又然る時はE及F階級の田圃に對しても地代は發生するを得ず、且つ地主の極度の貪婪を以てするも此際是以對して地代を強奪する事は出來ぬ。是に反して如説の事

情の下に於ては、C階級の田圃を占用せる農夫は、其耕耘の失費を報償せる上、更に地主に對し一ボル毎に一志に相當する地代を支拂ひ得る餘裕を存する事は明瞭である。同様にB及A階級の田圃の占用者は、夫々其所産の一ボルに就き二志及び三志に相當する地代を支拂ふ事が出来る。且此等の田圃の地主は如上の地代を領收するに些少の困難をも見出さぬであらう。蓋し農夫は此の土地に於ては假令地代を支拂ふとも、全然地代を支拂はざるD階級の田圃に於ると、同等に餘裕有る生活を營み得可きを發見し、孰れの田圃をも等しく易々として採擇するであらうからである。

更にA B C Dの各階級に歸屬せる田圃の全産額が全住民を支持するに足らずと假定せよ、然らば若しも平均賣價が依然一ボルに就き十二志を保持する時はE或はF階級の田圃は一として

耕耘を許さないから、住民は其欲求を充足する爲に、穀物を異邦から輸致するの必要に迫られるであらう。然し若し穀物が其異邦より平均一ボルに就き十三志以下に於ては輸致する能はざるを發見すれば、内國市場の價格は此率にまで騰貴するであらう。爰に於てかE階級の田圃は開墾せられ、且D階級の田圃は既往に於てC階級に依り提供せられしと同等の地代を地主に提供するであらう。又他の諸階級に關しても、各自の地代は一齊に同一の比例を以て騰貴するであらう。若し此等の田圃が全住民を支持するに足る時は、價格は永劫十三志に停頓するであらう。然し其上更に不足を存し、且一ボルに就き十四志以下に於ては之を填補し能はざる時は、市場の價格は復た此率にまで昇騰し、其際F階級の田圃も共に開墾せられ、他の諸階級の地代も是に比例して昇騰するであらう」(Anderson:

An Enquiry into the Nature of the Com-Laws, 1777, pp. 45-47).

耕転を許さないから、住民は其欲求を充足する爲に、穀物を異邦から輸致するの必要に迫られるであらう。然し若し穀物が其異邦より平均一ボルに就き十三志以下に於ては輸致する能はざるを發見すれば、内國市場の價格は此率にまで騰貴するであらう。爰に於てかE階級の田圃は開墾せられ、且D階級の田圃は既往に於てC階級に依り提供せられしと同等の地代を地主に提供するであらう。又他の諸階級に關しても、各自の地代は一齊に同一の比例を以て騰貴するであらう。若し此等の田圃が全住民を支持するに足る時は、價格は永劫十三志に停頓するであらう。然し其上更に不足を存し、且一ボルに就き十四志以下に於ては之を填補し能はざる時は、市場の價格は復た此率にまで昇騰し、其際F階級の田圃も共に開墾せられ、他の諸階級の地代も是に比例して昇騰するであらう」(Anderson:

如上の言辭は必ずしも地代を支拂はざる既墾地が現實に存在する事を主張せるものではない。「アンダーソンは最後に耕作せらるゝ土地が何等の地代をも齎らし得ないとは云はない。彼は唯だ若しも經費即ち生産費に平均利潤を加算せるものが、産物の市場價格と其生産價格との間に於る差等を消滅せしむる程に甚大なる時は地代も亦た消滅す可き事、且又土地の楷梯が漸次低下し行くに従つて、斯かる場合の生ずるに相違なき事を云爲せるのみである」(Marx: Theorien über den Mehrwert, Bd. II. Teil. I. SS. 334-335)。

乍併姑らく這般の異同を度外視すれば、斯の如き言説が疑も無くリカアドオの所論の核心たる較差地代の見解を披瀝せるは、何人も認容す

乍併姑らく這般の異同を度外視すれば、斯の如き言説が疑も無くリカアドオの所論の核心たる較差地代の見解を披瀝せるは、何人も認容す

る所であらう。且夫れ假設の二前提より累次論理の連鎖を演繹し來る経路は、宛然リカアドオの常套手段を髣髴せしむるものがある。更にアングーンが如上の根據に立ちて地代と價格の相互關係に論及するに方り、兩者の近似は愈々顯著である。以爲らく「地代が土地生産物の價格を決定するにあらず、却て土地生産物の價格が地代を決定するのである」(p. 45)。其故如何と云ふに前掲の例示に於て、「假に郷紳士が愛國心の異常の發露並に工業獎勵の法外の願望の爲にE及びF階級の田圃からは一物をも要求せざる程に彼等の地代を敢て低減し、且つ他の總ての階級の地代を是に正比して低減したりとせよ。其結果穀價は低落するのであらうか。決して然らず。住民は依然F階級の田圃の全産物を所要する事従前の如く、且此等の田圃の農夫に對して、其耕作を可能ならしむる所の價格を支拂ふ

低落するであらう。然し此地代の低落と共に穀物の生産量は減退するであらう。そして住民は其日常の麵麩を他郷に依頼するの必要に陥るであらう。斯くて畢竟地代は決して專斷的のもので無く、却て穀物の市價に左右せられる。又市價は市價で穀物に對する有效需要並に其穀物の生産せらるゝ地方に於ける土地の豊饒性に依て左右せられる。かるが故に獨り地代の低減のみが決して穀價を低廉ならしむる所以にあらず」と云ふのである(p. 48)。

固よりアングーンは既述の如く單に地代を附隨的に考究せるに停まり、爰に引用する長文の所説も僅に其著の脚註として披瀝せられてゐる程であるから、例へば貨幣地代と穀物地代との關係の如き、微に入り細を穿つ研纂に於ては到底リカアドオに及ばざるや遠しと雖、尙其地代と價格との相互作用に關し是れが先驅を爲せ

可き必要がある。故に農夫は依然従前の如く一ボル毎に十四志を受容するに違ひ無い。又E・D・C・B・Aの産する穀物は尠く其質が等しいから、此等の田圃の占用者等は其所産に對して同一の價格を受容するであらう。爰に於てか此のドン・キホーテ式の企劃から由來する唯一の結果は地主の失費に於て農民階級を賑はすに終り、穀物の消費者に對しては些少の利益をだも齎さない。否恐らくは利益に逆行しやう。蓋し此方策に依つて此等の農夫の勤勉は弛緩せられるかも知れぬからである」(p. 48)。

斯く地代が價格を支配せざるは明瞭であるが、反對に價格は地代を支配する。即ち「若しも一方に於て何等か政治的處置に依り燕麥の價格が一ボルに就き十四志より十三志に低下せらるゝならば、必定F階級の總ての田圃は鋤の見捨つる所となり、他階級の田圃の地代は勿論

る事は、如上の言辭の明示する所である。故に Marx がフイジオクラートの地代學說はアングーンの上記の辭令に依つて顛覆せられたりと云ひ、又 McCulloch が該著の上梓を以て「地代の性質並に起源に關する最初の説明を賦與せるに依り國民經濟學史上重要な年代なり」と云ひ、或は Jevons が「地代學說は一七七七年アングーン氏に依つて始めて發見且つ明快に説述せられたり」と云へる褒辭の必ずしも失當ならざる所以を首肯しなければならぬのである。乍併其出發點に於てリカアドオの根本原理と斯く顯著なる合致を示せる彼は、其到達點に於て前者と莫大なる間隔を生ずるに至つた。蓋し人口の漸増が社會に及ぼす效果に關し、至上の樂觀と極端なる悲觀と、兩者は正に相背離する兩極に對峙したるが故である。

三

乃ちアンダーソンは語を次で云ふ「然し本來最低級に屬せる田圃も善良なる耕作に依り何時かは上級の田圃に位する程に改善する事が出来るから、若し市場の安定を與ふ可き適當なる方策並に農夫に對する所要の獎勵が行はるゝならば、穀價が漸時従前より低落する一方に地代は亦た昇騰すると云ふ現象が自然に生起するであらう。而して斯かる効果は農業振興の結果でなければ決して招徠するを得ないから、随つて工業家に對して穀物の價格を低減すると共に地主たる郷紳士の收入を改善する唯一の實踐的手段は、市場に安定を與へ農夫に安心を與ふる事である。且それは穀物條例の公平なる施設に依て著しく増進せられるであらう」と(pp. 48-49)。

斯くて社會の發達に伴ふ人口漸増の結果、徐々に耕作は優良地より劣悪地に及ぶと云ふ事實は、リカアドオに於ては絶對的であるがアンダーソンに、彼等自身の利潤を減退して農家の穀物に莫大なる高價を與へ、以て勞働者等を再び農業に復歸せしむる必要に迫られるであらう。

然し若し人口が斯く増加せるに、農業に一層の獎勵をも與へず又穀價を昇騰せしむる事も無く、却て住民が何等か政治的制規に依つて暫らく穀價を低落せしむる工夫を案じ、一方工業品に對する需要従前の如しとすれば、工業家の領收す可き利潤は不權衡に莫大となり、爲に農業勞働に雇傭せらるゝ僕婢其他は、農家が彼等に他の職業に於て享得すると同等の勞銀を與ふるにあらざれば、工業に身を轉ずるに至るであらう。其結果従前D階級に屬せし田圃はE階級に墜落し、其他も是に習ふであらう。故に假令價格が従前通りを保持することも、既往と略ぼ同量の穀物を齎す事は不可能であらう。爰に於てか工業家は食物の潤澤なる供給を享受し得る以前

アンダーソンに従へば相對的である。蓋し前者は科學の進歩が一時的消極的に此現象の進行を阻止する事有る可きは認識せるも、尙其究極の歸趨を不可抗なりと看做す觀念を遂に一掃する能はざりしに、後者は科學の進歩が適當なる政策と相俟つて、積極的に且つ無限に劣悪地を優良地に轉換し得可き事を確信して疑はざる故である。而して斯かる根本的思想の相違は、應て亦た前者が關稅撤廢自由放任の提唱者たるに反して、後者が適當なる保護貿易を始め凡ゆる農業振興策の發現を希求して、歇まざる所以である。以爲らく「前叙の推理に伴ふ必然の結果、若し特定の地方に於て工業繁榮し人口増殖する時は、當然食糧に對する需要は増加するであらう。然るに若しも農業が其技術の改善を促進する程に適當なる獎勵を蒙らざるに於ては、必然一層稜角不毛の田圃例へばG階級の田圃の耕作費を報

に、彼等自身の利潤を減退して農家の穀物に莫大なる高價を與へ、以て勞働者等を再び農業に復歸せしむる必要に迫られるであらう。

然し若し斯く不可能事を企圖するの迂愚を歇め、農業を堅實に擁護す可き制規が採用せらるゝならば、農家は徐々に其田圃を従前以上に豊饒ならしめ、爲にF階級の田圃は順次E・D・C等の階級を通過して恐らく遂にA階級にまで向上するであらう。其結果穀物の生産量は、然も一層僅少なる失費に於て、全住民を支持するに充分事足るに至るであらう。それ故に農家は其土地に對し上進せる地代を支拂ふと共に其産物を従前よりも低廉に賣却するに拘らず、同等の利潤を收めるであらう。斯くの如くにして賢明なる方策を採る事に依り、農業工業の兩者を獎勵する事が出來よう。農家は愈々富裕を加へて自立的となり、同時に穀價は減退し然も地代は

増進せられるであらう」と(P. 4050)。

思ふに此時に於てはマルサスの「人口論」未だ世に現はれず。随つて所謂人口の原理が社會進化の前途に對し暗影を投ずるか光明を點するか問題は、公衆の熱烈眞摯なる考慮を促すに至らなかつた。故にアンダーソンの前著に於ても如上の快適なる樂觀論を披瀝し乍ら、尙此點に深く關説する事無くして終つたが、爾後一八〇一年に現前したる著作に於ては、明瞭に彼れの態度を窺知せしむるものがある。以爲らく「過去一世期間の後半に於ては、人口の増加は其前半に於るよりも迅速では無かつたと看做す可き充分なる理由がある。乍併吾人は不要に此點を力説する事を避けて、假に後半に於ては前半に於るよりも實際人口増加が迅速なりしと假定せよ。若しも人口増加が此國土に於る穀價並に生産力に何等かの影響を及ぼすものこそば、そは

せるは皆無である。如何となればそは刻苦精勵の氣力を消沈し、爲に彼等自身が驅逐せんと欲する害惡其物を必然増大す可き方向に導き、一方該艱難を消除す可き唯一なる有效手段と看做さるゝ努力を沮喪する故である——如何なる國家に於ても人口の増殖は其國の田圃が其生産力の可能的最大限度に到達せざる間は(此限度への到達は恐らく地球上未曾有の現象であるが)、其追加せられたる人員の爲に必然生活資料を減退するよりも寧ろ増進するであらう。反對に人口の減退は亦た生活資料の減退を導くであらう」(Anderson: A Calm Investigation of the Circumstances that have led to the Present Scarcity of Grain in Britain, suggesting the Means of alleviating that Evil, and of preventing the Recurrence of such a Calamity in future, p. 11, p. 54, p. 55.)。且つ夫れ「如何なる國土の

過去一世期間に於ては、同じ種類の効果を齎らせる筈である。其唯一の相違は此期間の後半に於ては其前半に於るよりも、其効果が一層迅速であつたと云ふに過ぎない筈である。然るに統計に於て如何に此僞説が事實と相違するかを見よ。吾人は過去一世期の前半即ち一七〇〇年より一七五〇年に至るまでは、小麦一クォーターに就き二磅十八志一片より徐々に一磅十二志六片に至るまでの價格の規則的且つ累進的低落を見る。而して後半即ち一七五〇年より一八〇〇年に至るまでは、一磅十二志六片より五磅十志に至るまで略ぼ規則的に昇騰した。爰に於てか効果は同じ種類にあらず換言すれば單に程度上の相違にあらずして、實に其性質を相互に正反對としてゐる。加之「凡そ現存の諸般の偏見中、人口の増殖が自然各國に食糧の缺乏を惹起す可しと思惟するもの程、爾く有害なる傾向を把持

如何なる一片の土壤と雖、假令自然的には異常に豊饒なる状態にあらざるものも、人類の勤勉に依り愈々生産力を増進し得可く、又賢明なる治策の下に於ては該生産力は無限の期間に亘つて年々増大し、遂には恐らく現在に於ては想像に由無き程の莫大なる程度の生産力を獲得するに至るを得可し」(p. 3536)。故に「此否定す可からざる事實より生ずる自然の結論は、苟くも土壤の缺如せざる國土に於ては如何なる立法者も、人口の増加が庶民の生活資料を減少す可きを危惧する必要は斷じて無いと云ふのである」(p. 41)。

私は以上に於て大體アンダーソンの著作に現前せる地代學說の精要を説き終つた。次節に於ては是れとリカアドオの所論との簡單なる對比を試みるであらう。

四

洵に Marx の考察の如くに、人口の繁殖と收穫の増減に關する兩者見解の絶大なる杆格は、専ら各自の時代背景に起因するものである。即ち略ぼリカアドオの存生期に該當せる一七七〇年より一八一五年に至る間は小麥の價格は確實に騰貴した。然るにアンダーソンの生存せる十八世紀に於ては初葉より中葉に至る間は穀價の低落を、而して中葉より末葉に至る間は穀價の騰貴を見た。換言すれば人口は不斷に増殖せるに拘らず、穀價は或は低落し或は騰貴したのである。故にアンダーソンの場合には、自己の發見せる法則と、土地生産力の遞減若しくは土地生産物の規則的騰貴とは全然一致してゐない。然るにリカアドオの場合には一致してゐる。是れアンダーソンが穀物條令(當時は輸入獎勵金)の廢止が十八世紀後半に於る穀價騰貴の原因を爲せりと確信するに對し、リカアドオが穀物條

令の(一八一五年の)介入が穀價の低落を阻止す可く又或る程度まで必ず阻止するに相違なき事を知悉せる所以、而して後者が人口漸増の結果或る一定の領域内に於ては、徐々に地味の遞減する土地に倚賴するの餘儀無きに至り地代は上進し農産物は騰貴す可しと云ふ悲觀論を力説するに反し、前者が輸入税を徵收する穀物條令の制定に依り、一定領域内に於る農業の適當なる發達を促進すれば、生産力の増進に依つて上進せる地代を支拂ひ乍らも、農産物を低廉ならしむるを得可しとの樂觀論を抱懷する所以である (Marx: Theorien über Mehrwert, BD. II. Teil. I. SS. 4-5)。

斯くて兩々等しく較差地代の見解を保持せるに拘らず、一は所謂收穫遞減の法則に立脚し、他は謂はゞ收穫遞増の法則に安住した。而して其科學的價値の關與する限りに於ては、吾人は

リカアドオの所説が其先蹤を凌駕する事の遙に數段なるを信じて疑はざるものである。如何となれば彼れは人間の刻苦に依つて生起せる生産増加と、自然の豊饒並に地位の好適に依つて生起せる生産増加とを頗る明確に區別した。換言すれば彼れは「土地其物」に負ふ收入のみを地代と名付け、以て凡ゆる種類の人間の刻苦に依つて土地より利得し得る収入と判然區別せんと欲したのである。

固より増進せる穀物の需要が、唯單にリカアドオが専ら眼中に置ける場合である所の、貧瘠なる土地の耕作に依つてのみ充足せらるゝにあらずして、却て此増加せる欲望が凡ゆる種類の技術的進歩に依つて價格騰貴を招徠する事無しに充足し得る可しと云ふは確に正しい。乍併斯かる特殊の努力の結果實現したる收穫は「地代」の中に入る事無く、却つて勞銀、利子、利

潤等の形態に於て、「地代」に對する甚だ重要な對重 *Gegenwert* を形成するであらう。畢竟リカアドオ流地代學說の偉大なる功績は、正しく彼れが二様の收穫即ち人間の行爲に負ふものと是に基かずして發生するものとを明瞭に區分せる事である。然るにアンダーソンは此兩者を合同し、自然の力に依り齎されたる收穫も人間の力に依り齎されたる收穫も共に「地代」と名付け、爲に全く地代の問題の明快なる解決を抛棄した。そは洵にリカアドオの始めて成功せる所である」(Diehl: Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, BD. I. SS. 407-408)。

此點に關して Cannan は謂ふ「リカアドオの學說の或る特定の點に關するアンダーソンの先蹤をば、全學說に關する先蹤である」と誤解してはならない。既に吾人の述べたる如

く彼は收穫の遞減を信せず却て其無限に増加す可きを確信せる夫の熱烈なる農業獎勵論者の一人であつたのである。若し彼れにして一八一五年まで存生したりと假定せば、彼れは最も確實にリカアドオの最も力強き反對論者の一人であつたであらう」云 (E. Cannan: Theories of Production and Distribution, 3d. ed. pp. 372-373)。

私は Diehl と共に此適言に聽従せんと欲するものである。

最後に銘記を要するは、アンダーソンの先蹤を疑も無くリカアドオは知悉せざりし一事である。故に前者の思索が後者の思索に若干を寄與せる所有りとせば、それは決して直接の態様に於てにあらずして、實に間接にマルサスの媒介に依れるものである。リカアドオ自らが其地代學說の先驅者として列擧せるは、彼等と時代を同じうする三學究に過ぎぬ。就中其所論の最もリ

の任命を請し、本提案は擱置されたのである。委員會の報告は過去二十年間に招徠せる「甚だ迅速廣汎なる進歩」に關する頌詞、並に若しも多數の農事改良が之を繼續するに充分なる獎勵を缺如する爲に未成状態のまゝに抛棄せらるゝに至らば、そは由々しき不祥事なる可しとの建言を以て始まつてゐる。而して斯くの如き農事改良の原因は、委員等の判斷に従へば、主として聯合王國內に於る人口の増殖と殷富の發達に發源するものであるが、更に彼等はそれが奈翁戰爭に基く輸入途絶に依り間接の刺戟を享受せる事を力説する。曰く「然し世人が永久的且つ累進的性質を具有せりと信する如上の諸原因が、戰爭繼續中、外國産穀物の輸入を防遏せる諸事情に依り、偶發的ではあるが然し莫大なる援助を蒙れるは蔽ふ可からざる事實である。然るに此輸入障碍の突然の撤廢は土地占用者間に或る種

カアドオに接近せりと看做す可きは Edward West である。

五

リカアドオの經濟學說は洵に其餘りに清澄透徹せるの故に、屢々抽象の世界に悠遊して何等現實活社會の真相とは關與する所無しとの誤解を導びいた。乍併彼れの實際家たる經歷と其學說の動機とは、斯かる謬見を全然裏切る證左である。爰に討究の對象と成れる地代學說も亦た其本源に於ては、當年の穀物條例を環る囂々たる論争の一副産に過ぎざるものである。

一八一三年より一四年に亘る會期に於て、英國下院は政府の提案に懸る穀物輸入税率の改正に關し、長時間の峻烈なる討論に携はつた。該提案に反對する請願書は頻々として都市より到り、反對論者は甚だ執拗に其延期と一層慎重なる考究を要請せるを以て、政府は遂に調査委員

の恐惶を惹起し、そは觀者の意見に依れば之を緩和せざる限り、嘗に今尙荒蕪不毛の狀態に在る廣汎なる區域の土地の圍繞並に開墾を阻害するのみならず、又他の部分に於る改良精神を削滅し既に耕耘の下に在る土地に於る一層の改良を防遏する傾向が有ると思はれる」と。爰に於てか彼等は戰爭終熄後と雖尙農事改良の爲に輸入制限事情の存續を必要と看做し、穀物條例に依る保護關稅を以て是れに充當せんと思惟せるものである。次に掲ぐる兩個の問答は能く這般の真相を明示してゐる。即ち或る土地檢察官に對して問「最近數年間に於る圍繞の激甚なる増加の原因如何」、答「穀價の騰貴である。」問「其效果如何」答「是れ無くんば耕作せられなかつたであらう所の多量の土地が開墾せられた。問「産額は増加せりや減退せりや」、答「頗る非常に増加せり。」問「若し價格が著しく低減せらるゝ

時は、圍繞の數は持續す可きや、答「確に然らず。」問「耕作地の産額多量に上らば、穀物並に屠肉の價格は騰貴す可きや低落す可きや、答「低落す可し。」又或る農業者としての體驗を有する地主に對し、問「若し小麥が八十志、他の穀物が是に比例する價格を持つ時は、貴家は農夫が尙現在の耕作様式に於て其土地の耕作を持續す可しと信するや、」答「確に然らず、余は一層少額の小麦が蒔かれ、一層少額の貨幣が土地耕作に費やさる可しと信す。」問「如上の價格は優良地に對するよりも劣等地に對して遙に甚大なる影響を及ぼすにあらずや、」答「然り、蓋し劣等地に於る失費は、一層多額なるを以てある。」問「然らば如上の價格の結果は、一般の農夫が劣等土壤の耕作より彼等の資本を引去る事にあらずや、」答「然り。」(Cannan: Theories of Production and Distribution, pp. 154-156)。

此等の報告書は廣く一般に普及した。而して彼等が如何に密接に農事改良の進歩、人口の増殖及び國家の富を以て、貧瘠なる土壤の開墾並に收穫の遞減と連結せるかを思考する時、吾人はリカアドオ流地代學說が此の時に於て興起せるは極めて自然の數であつたと首肯せざるを得ないのである。就中一八一五年に出でたるウェストの最初の小著“Essay on the Application of Capital to Land with observations shewing the Impolicy of any Great Restriction of the Importation of Corn, and That the Bounty of 1688 did not lower the Price of It”の冒頭に開陳せられたる次の如き言辭は、當時の世情が如何に論客に直接至大の刺戟を與へたるかを雄辯に物語るものである。曰く「本論文の主なる目的は經濟學に於る一原理の發表であつて、數年前以前夙に余の腦裡に浮べる所、而して余の見

解に依れば、之を餘外にしては説明の方途に迷はしむる斯學に於る幾多の難關を解決する所のものである。最近穀物條例に關する調査委員等の報告書を披見するに及び、余は該原理の存在に關する余の意見が、多數證人の詳細なる證言に依り裏書きせらるゝ事を知つた。斯がる事情に加ふるに、此原理が穀物問題の幾多の諸點の適正なる理解に重要である事は、余を誘つて敢て其公刊を議會開會以前に行ひ、爲に今少しく時間の餘裕有らば斯くも有りなんと思惟する形態よりは、甚だ不完全なる形態にて甘んせしめたる所以である。」(West: Essay on the Application of Capital to Land, Hollander's ed. p. 9.)。而して其原理とは收穫遞減の法則に外ならざるものである。

六

即ちウェストは語を次いで謂ふ「爰に謂ふ所

の原理とは單に、耕作改良の進化に伴ひ、原産物 *rude produce* の生産は累進的に失費を増す、換言すれば土地の純收穫が其總收穫に對する比率が繼續的に減退すると云ふのである」(p. 9)。「凡そ如何なる國土に於ても、其進化の道程に當つて、農業労働の生産力の改善が工業労働の生産力の改善に比し迅速ならざる事は、或は寧ろ同一命題を一層精確に表現すれば、原産物を齎らす労働生産力の改善が、之を精製するに有效なる労働力の改善よりも迅速ならざる事は、經濟學の總ての論客に依り認容せらるゝ事實である。此現象は從來唯だ、農業に於ては工業に於るが如く分勞の實行容易ならず、隨つて亦た機械の利用の不可能なる一事にのみ説明を求めて來た。」國富論の著者アダム・スミスすら、農業に雇傭せらるゝ總ての種類の労働の分枝を完全に分離し能はざる事が、恐らく農業労働の生産力

の改善が、常時工業労働の生産力の改善と、歩調を保たざる理由であると云つてゐる。乍併、

に同量の製造品を製造するは明瞭である」と (pp. 10-12)。

ウェストに従へば、農業労働生産力と工業労働生産力との改善の遅速を斯くの如く單に分勞並に機械利用の難易に歸する時は、唯だ其比較的遅速を説明するに停まり、進んで實質的に農業労働生産力の改善を阻止する原理、そは其作用する程度に従ひ斯かる改善を、或は單に遅緩するに停まり、或は全終熄し、又或は耕作進展に伴つて生産力を現實に低減する所の原理の存在を逸してゐる。此原理とは「農業に投下せらるゝ各々の同量の追加作業 *work* は現實に遞減する収益を齎すと云ふのである。而して勿論各々の同量の追加作業が現實に遞減する収益を齎らすならば、進化の道程に於て農業に投下せらるゝ作業の全體は現實に比例的に遞減する収益を齎らす。反之、工業に於ては同量の作業が常

更に彼れは社會の進化に伴ひ漸次劣等階級地の開拓を促がす理由を此收穫遞減の法則裡に認める。即ち人口増殖に對應す可く生産を増加する爲に「土地に投加する所の追加作業は、處女地を開墾するか或は既墾地を一層深く耕作するか、其就れかの爲に費やされねばならぬ。如何なる國土に於ても最良地と最悪地との間に介在する階梯は、無限であるに違ひ無い。最も豊饒なる土地或は最も市場に對して便宜なる地位を占據せる土地、換言すれば、地位と地質と兩者の複合的關係に於て、投下費用に對し最大の收穫を齎らす土地が勿論最初に耕耘せられるであらう。而して進化の道程に於て處女地を開墾する時には、必然劣悪地或は尠く共既墾地に對し其質に於て第二位に在る土地に倚頼しなければ

ない。此場合に於て投下せらるゝ追加作業が以前 投下せられたる作業よりも尠少の收穫を齎す可き問題が残り、社會の進化に於て新地を開拓せらるゝ事實も、事實も、既墾地に於て作業を追加するも、従前と同 利益を隨伴 難き所以を立證するものである。蓋し豊饒地百エーカーが十人の作業に對して與ふる收穫は、固より貧瘠地百エーカーが是に對して與ふる收穫よりも多量なる可く、爰に於て此同一の豊饒地が二十人、三十人、百人の作業に對しても、十人の作業に對して與へたる收穫と同一比例の收穫を繼續賦與するものとするれば、貧瘠地は決して耕作せらるゝ事が無いであらうからである」と述べてゐる (p. 14)。

爰にウェストの所謂作業 *work* とは労働 *labour* の直接的效果を意味し、例へば特定の方法に依る一エーカーの土地の犁鋤、或は特定面積の溝

渠の穿掘等を指すのであるが、然らば労働に對しても亦た作業に對する如く收穫遞減を惹起す可きや否やの問題が残る。彼は是に答へて謂ふ既述の理由に基き、進化の道程に於て同量の作業が土壤より抽出する收穫は漸次減退する。故に亦た進化の道程に於て土地に投下せらるゝ作業の全量に就いても其の土地より抽出する收穫は漸次比例的に減退する。乍併一定数の人手に依つて爲し得らるゝ作業の分量は假令農業に於てすら、分勞並に機械の爲に増加せられる。そこで斯かる農業上一定数の人手に依つて爲される作業分量の増加は、同一分量の作業に對する收穫の遞減を報償して餘り有るか、或は丁度報償するか、若しくは報償するに足らざるかである。第一の場合に於ては農業労働は絶對的に其生産力を増大するであらう。第二の場合に於ては、常に同等の生産力に停まるであらう。最後

の場合に於ては、絶對的に其生産力を減少するであらう」(pp. 151)。然らば其孰れの場合が事實に相當するやと云ふに、ウエストは直接農業労働の生産力が過去の歴史に徴して實際増減孰れの方向に進展し來れるやを觀照する事無く、却つて間接に「富裕なる國土に於ては貧窮なる國土に於るよりも資本利潤が常に低いと云ふ公認の事實」から演繹し、以て問題の解決を試る。即ち彼れは労働生産力の増進は必然的に利潤の増進を意味するものと速斷し、更に是よりして工業上の生産力の増加は、若しも農業上の生産力が減退せざるものとせば、利潤の騰貴を惹起するであらうと論じ、然るに實際は利潤は騰貴せずして却つて低落するのであるから、農業生産力の減退は工業生産力の増進を相殺するよりも更に甚しい道理である。斯くて畢竟進化の道程に於て分勞と機械使用とは常に工業上に於る

のみならず亦た農業上に於ても労働生産力を愈々益々増進するの傾向あれども、然も他の原因即ち既墾地よりも一層低劣なる土地に倚賴するの必要、若しくは同一の土地を一層多額の費用に於て耕作するの必要は農業労働の生産力を一層減退せしむる傾向がある。而して後の原因は農業上に於る機械並に分勞の効果を相殺するよりも更に甚しい」との結論に到達してゐる(pp. 23-24)。

ウエストは根本原理の強調に急にして、是れが解説に於ては稍蒼卒蕪雜の憾み無きを得ないがそは恐らく彼れが冒頭に披瀝せる如き時局の切迫が、周到なる表現の餘裕を許さなかつた爲であらう。姑らく此點を寛恕すれば前掲の言説が地味の差等並に收穫遞減作用の結果を孰れも堅實に把握せるは争ふ可からざる事實である。

Canan は謂ふ「吾人はウエストの小冊を味讀す

る時、所謂收穫遞減の法則の今日云爲せらるゝ本質的形態並に之を表現する所の措辭が、單に彼れをリカアドオの「原論」の序言に於る儀禮一片の關説の對象として知悉せる人々の想像するよりも、遙かに多く彼れに負へる事を發見せざる能はざるものである」云 (Canan: Theories of Production and Distribution, p. 160)。私は問題を收穫遞減の法則に限局する時は、此評言の承認に躊躇しない。乍併如上の讚辭は、地代の問題に轉向する時、孰れの點まで之を擴充するを得可き乎。私は進んでウエストの地代學說を檢討しなければならぬ。

七

ウエストに従へば「地代を支配し且つ殆ど其唯一の原因たるものは、土地に投下せらるゝ資本の追加部分に關する收穫の遞減である。若し資本が無限に同一利益を以て土地に投下し得ら

るゝものとすれば、生産額も亦た勿論無限であつて、且つ其地代に及ぼす影響は耕作に至便なる土地が無限に存在する場合と同然であらう。此孰れの場合に於ても地代は極めて些少であらう。乍併地代を増加するは劣等地に倚賴するの必要と、且つ既墾地に對し遞減する收益に於て資本を投下するの必要とである。斯くて穀物に對する需要の束許増加せる場合に、資本が従前同様の利益を以て投下せらるゝならば、此増加分量の産出價格 growing price は従前に等しかる可く、競争は固より直に現實價格 actual price を産出價格にまで控制し、爲に地代は毫も増加するを得ないであらう。然し苟くも穀物に對する需要の増加する時は、既に示せる如く、此需要増加に對應する爲には、資本は一層不利なる條件に於て投下せられる。かるが故に所要の追加分量の産出價格は増加せられる。そして該分

量の現實價格も亦た増加せられるに相違無い。然し最少費用を以て産出せらるゝ穀物も勿論最大費用を以て産出せらるゝ穀物と同一價格に賣却せられるであらうから、随つて總ての穀物の價格が需要の増加に依つて騰貴せられる。然し農夫は其産出する所に對し唯だ普通の資本利潤を收得するのみであり、それは最大費用を以て産出せらるゝ穀物に對してすら賦與せられる。故に一層尠少なる費用に於て齎さるゝ産額の部分に對する總ての追加利潤は地代の形態に於て地主の掌中に歸する。

扱而各々十エーカーの面積を有し、然も特定の資本例へば十磅に對する收益が、夫々二十パーセント、十九パーセント、十八パーセント、十一パーセント、十パーセント等なる種々なる土地有りど假定せよ(此點ウェストは表解を用ゆ)。今資本利潤が十パーセントなるに於ては、

う。同一の理由に依り若しも穀價の低落が最後の十エーカーに於る利潤を一パーセント削減するに至らば孰れかの土地が耕作より脱退し、且つ殘餘の耕作地に於る地代は低下せられるであらう。然し吾人は穀價の騰貴は常に新鮮なる土地を開拓せしむるのみならず、亦た新鮮なる資本を従前の耕作地に轉向せしむる作用有る事及び價格の不斷の低落は常に土地を耕作より脱退せしむるのみならず、亦た資本の一部分を土地より脱退せしむる作用を有し、其土地は一層低減せる費用に於て依然耕作を繼續せらるゝ事有る可きを知る。扱而前掲の、與へられたる價格に於て二十パーセントの収益を生ずる土地に就きて考ふるに、如何なる價格の減少もそれが半減以下に停まるに於ては、資本を斯かる土地より脱退せしむる事は不可能と思はれる。蓋し穀價が假令利潤を十一パーセントに減退する程に低

最後の十エーカーの面積は地代を課して耕作せしむるを得ず、其土地所有者に依つて耕作せらるゝか或は地代を得んとならば牧場として放置するかであらう、然し十一パーセントの収益を齎らす十エーカーの土地は、借地人の資本に利潤を支拂ひたる後尙地代として一パーセントを支拂ひ、且つ最優等の十エーカーより産出せられたる穀物は、最劣等の十エーカーより産出せられたる穀物と同一價格に賣却せられるであらうから、斯かる土地は地代として地主に十磅を支拂ひ、次位の十エーカーは九磅を支拂ひ以下是れに準ずるであらう。然るに假に穀價が騰貴し、其結果最後の十エーカーの利潤が十磅より十一磅に増加したりとせよ。然らば従前耕作に依りて辛うじて資本利潤を支拂ふのみであつた十エーカーは、今や地代を課するも耕作せらる可く、且つ總ての土地の地代が騰貴するであら

落しても、依然同一資本を投下する價值があるであらう。如何となればそは他の如何なる事業に於る資本よりも尙一パーセント多くの利潤を齎らす故である。而して此一パーセントが地代となるであらう」(West: op. cit., pp. 38-40)。Cannan は前掲の「如何なる價格の減少も、それが半減以下に停まるに於ては」any diminution of price under a diminution of one half といふ一句は、恐らく、「如何なる價格の減少も、それが最優等の十エーカーに於る純収益を半減せしむる以下に停まるに於ては」any diminution of price which would reduce the net returns on the best ten acres by less than one-half といふ意味で、單に表現の形態に關する迂濶なる失錯に過ぎざるものであらうと云ひ、又「同一資本」the same capital とは勿論「同額の資本」the same amount of capital の謂ひであらうと註釋

してゐる (Cannan: *Theories of Production and Distribution*, pp. 318-319)。後者は兎も角前者は餘程の寛容と思ふが私は今深く此點を追求せずして、ウェストの最後の論述に急がう。彼れは續して云ふ、何に故如上の現象が生ずるか云ふ難問は、唯だ資本の各部分に對する收益遞減の原理に依りてのみ説明する事が出来る。即ち、其真相は百磅に對し二十パーセントの收益を齎らす土地は、既に示せる如く、百磅よりも一層僅少なる資本に對しては二十パーセント以上の收益を齎らす、随つて是れに投下せらるゝ百磅の最初の部分に對しては、其後の部分に對するよりも一層高率の收益を齎らすに違ひない。故に畢竟其收益を齎らす態様は次の如くであらう。即ち最初の十磅は例へば四十パーセントの純産額を生じ、次の十磅は二十パーセントを生じ、以下順次是れに習つて遂に資本の最後の投下部分

は十パーセント以上の純産額を生じないであらう。蓋し農夫は勿論十パーセントと看做さるゝ普通の利潤を齎らす限りは、出来るだけ多額の資本を投下するからである。爰に於てか地主の地代は、依然前の場合と同じく、全資本の上に、其資本中の最後の即ち最も不利なる部分の所産に對して造り出された超過額の總てであらう。且つ又前の場合と同様に若しも穀價が騰貴して従前十パーセントの純産額を生じたる該資本部分が今回十一パーセントを生ずるに至らば、更に新たな資本部分が投下せられるであらう。復た同様に穀價が低落して最後の資本部分の利潤を十パーセントより九パーセントに削減するならば、該部分は撤退せられるであらう。故に苟くも穀價の低落する場合に於ては従前最少の利潤を提供せる資本部分が撤退せられ、唯だ相當の收益を引續き齎らす

所の部分のみが残される。而して斯くの如き價格低落の地代に及ぼす影響は略ぼ次の如くであらう。

即ち例へば小麦一クォーターの價格九十志、地代一年三百磅、借地人の資本額千磅、是れに對する利潤一年百磅、産額千四百磅の計算にて貸借せらるゝ土地を假想せよ。今小麦が六十志に低落せる後若しも借地人が同額の資本を土地に留むるならば、彼れは其資本をすら再生する事は出来ぬであらう。況や地代は尙更支拂ふを得ないであらう。

然し此價格低落に際して彼れが其資本を八百磅に削減せりとせよ。

彼れは價格低落以前には其千磅の全資本に對して四百磅即ち四十パーセントの純利を得たのであるから、最初の八百磅に對しては四十パーセント以上を得てゐた道理である。そこで假令

價格低落の後と雖、彼れは八百磅に對して四十パーセント換言すれば三百二十磅の純利を得るかも知れない。其内利潤として彼れ自身の分前は八十磅で二百四十磅は地代として地主に譲渡するであらう。斯くて此假定の下に於ては三分一の穀價の低落は地代を僅に五分之一低落するに過ぎぬであらう」(pp. 40-41)

斯くの如くに通觀し來ればウェストの地代學說たる、リカアドオに優先して其主要原理を適確に道破せるかの概がある。然るに地代學說史上獨り後者が殷然重きを爲すに拘らず、前者が屢々逸失せらるゝ所以は奈邊に存する乎。

卑見に依ればウェストの地代學說がリカアドオのそれに對比し大なる軒輊を存するは、地代と價值價格との相互關係を闡明する事未だ甚だ審かならず、尠く共強調力説を缺如せる點に在

ると思はれる。彼れが地味の肥瘠地位の便否より發生する較差地代並に收穫遞減の作用より發生する較差地代の觀念を、極めて明瞭に把握せるは前叙の纏言の立證する所であるが、然もリカアドオ地代學說の主原理の一たる、地代が價格の一構成分子たる能はざる所以を十分明快に主張してはゐない。勿論彼れの論述裡に表現せらるゝ思索の連鎖は、一轉瞬の推理に依つて直に爰に到達す可きを強く示唆せるに相違無く、事實彼れ自身之を會得せりと思惟す可き理由が決して無いでは無いが、然も飽くまでも之を顯現力説する事無しに終つてゐる。或は彼れが此主要原理を強調せざりし所以は、それが彼れの學說の根柢を爲せるの餘りに、殊更注意を要求する必要が無かつたからで、這般の消息は彼れが一八二六年に公刊せる "Price of Corn and Wages of Labour" の證明する所であると辯護

し、是れに反して後者は收穫遞減の法則を極力強調して、地代が價格を支配し能はざる所以を尠く共輕視してゐた。然るにリカアドオに至つて兩者の缺陷は填補せられ然も一層廣濶なる見地より渾然たる地代學說の樹立を見たのである。私は大成必しも獨創に劣らず否屢々是れに優越する事有るを確信するものであるから、此一事尙以てリカアドオの偉を稱するに足ると思ふが、然し同時に彼れが自己の見解の定まらざる以前にウェストの著書を知悉したりと假定せば此點に於て幾分後者に負ふものと認容しなければならぬ道理である。然るに一八一五年三月九日、リカアドオがマルサスに與へたる書簡中の一節は彼れが其地代學說の組織に關し、他者は暫く措き、尠く共ウェストには寸毫も負ふ所無かりし事實を極めて雄辯に立證してゐる。即ち云ふ「君と別後小生はエドワード・ウェ

を試むる論者あれども、そは畢竟リカアドオ自身其地代學說を最初に表白せる小著(一八一五年)並に之を大成せる「原論」(一八一七年初版)の出でたる後のウェストの著書を俟つて始めて成立する辯護であつて、假令ウェストが前著發刊當時既に既に該原理を會得せるの證左とはなつても、彼れが此點に於ても尙且リカアドオに優先したりと主張するの論據とはなり難いのである。況や廣く價值論分配論を背景とせる地代の徹底的考究の如きは、到底之をウェストに求むる能はざるものである。洵に McCulloch の所言の如く所詮彼れの著作は其目的に於て甚だ限られたるものとなつた。斯くてアンダーソンと云ひウェストと云ふも、リカアドオ地代學說の核心たる較差地代の觀念は共に明確に抱懷し乍ら、前者は地代が價格を支配し能はざる所以を専ら力説して收穫遞減の法則を全然排斥

スト氏より寸楮を得申候。彼れは A Fellow of University College なる稱呼を用ゆる著作家にて、勿論小生の意見に讚成を表し居候。蓋しそは彼れ自身の意見に甚だ酷似せる故に候。小生は彼れの著書を周到に味讀するに及び、彼れの考察の小生自身の考察に頗る一致せる所以を發見致し候」(Letters of Ricardo to Malthus, Bonar's ed. p. 63)。洵にウェストの著作の出版は一八一五年一月十三日より二月六日に至る間の某日、亦たリカアドオの地代學說の最初の表現たる "Essay on the Low Price of Corn" の出版は同年二月十日より二月二十五日前後に至る某日にして (Cannan: Theories of Production and Distribution, p. 161. note) 時日は極めて接近してゐたのである。爰に於てか時を同じうする二人の著者が相互に全く獨立して同一思索に到達したりと云ふ、諸般の科學の歴史に於て決

して稀有ならざる事實の偶發を見たるものである。且つ夫れ其内容に關しても「Turner は云ふ「リカアドオ自身は收穫遞減の法則に關しては、ウエストの著書に現前せる以上の優れたる叙述を與へてはゐない。乍併該法則を以て地代・利潤・勞銀の諸問題と連結し、而して之を分配論の一般體系に織込む事はリカアドオに残されたる使命であつた」(Turner: The Ricardian Rent Theory, p. 14)。それ故に吾人は假令ウエストの言説中に多大の獨創的卓見と透徹せる思索とを認めざる可からずと雖、然も之を以てリカアドオの功績を損傷するの具となすは絶大なる謬論なりと斷ずるを憚からざるのである。次に其所論の本質に於てリカアドオを去る事甚だ遙遠なるに拘らず、嘗て其卓越せる先蹤を以て擬せられ且つ自らも亦た是れに任じたるの故に、「一瞥を拂ふの要有るは Robert Torrens であ

る(未完)。

故田中教授

山崎 又次郎

法學博士、田中萃一郎教授の亡くなられたこと程、突然なるはなかつた。八月十四日の新聞を見た慶應義塾同窓は誰しもその事の意外に驚いたであらう。そして半信半疑で、早々、教授の宅に駆けつけたものもあつたであらう。現に私もその中の一人であつた。教授は鎌田前塾長の所謂「三田山慶應寺」の燈明の一つであつた。それが今、突然消えてしまつたのである。

田中教授は實に三田史學の重鎮であつた。由來、歴史家の間に於ては、殊に獨逸に於てさうであるが、歴史的發達を以て、全く個人の勢力

に歸する所のランケの一派、所謂「ユングランケナー」と、全く社會の團體的勢力に歸する所のラムブレヒトの一派とがあつて、兩派互に議論を戦はして居る。それで、教授をして言はしめると、「一方は極端なる個人主義の見地に立つて、「ヴァレンシユタイン史」とか「ビスマーク史」とか題して個人の傳記を以て歴史の全部であるとする一派であつて、他方は極端なる社會主義の思潮に左右せられて、「英國小史」とか「日本國民史論」とか題して歴史上に於ける個人の勢力を輕視する一派である」。教授は此等の兩派の中間を執つて居られたやうであるが、しかも個人の偉力を寧ろ重要視して居られたではなからうか。何時か、教授はあの古代史の大家ヘーデルマンの言葉を引いて、「民衆の漸く覺醒し來れる現代に於て、偉人の魅力益々その威を逞しうすと云ふは、一見悖理の如くなるもその

事實なるを如何せん」と言はれたことがある。丁度、今から十數年前のことである。私共がまだ大學の初年級であつた當時、教授は課外講義として、盛にラムブレヒトを研究し、ヘーゲルの歴史哲學を講義せられ居つた。教授はその時分から歴史哲學の方へ切り込んで行かれたのではなからうか。教授はまた非常に政治に興味をもつて居られた。歐米最近の政治史の如きは教授の最も得意とせられた所である。實際政治の問題に就いても亦、時々あの侃々諤々の議論を新聞雜誌に發表せられて居つた。殊に大正の政變當時、憲政擁護、閣族打破の運動が盛に行はれた時分に「歐米の政黨政治」と云ふ小冊子を公にせられて、大に國民の政治的見識の向上に盡された。また最近、普選問題が盛に論議せられるに至つて、「現在の如く一般の人心が共產主義や無政府主義のバチルスに犯されて放縱